

連	載	
講	座	
第	7	回

湿地帯に城をつくる

・木下藤吉郎

作家 童 門 冬 二

豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎と名乗っていたころの話だ。織田信長が美濃(岐阜県)の斉藤氏を攻めるために、木曾川の下流の墨侯(すのまた。洲股とも)に城を造ることを命じた。

みんなビビったが、木下藤吉郎が引き受けた。かれは、かねてからこの一帯を歩きまわって、特別に仲良くなった土豪がいた。蜂須賀小六である。小六は輪中(わじゅう)、をつくる技術に長けていた。おなじような仲間がたくさんいた。輪中というのは、土を円形に盛ってその中に集落をつくり、洪水を防ぎながら地域の人びとが生き抜くチエである。集落の中には、農耕具や最低限の食糧などを保存する倉庫もあった。これを水屋といった。藤吉郎は農民の出身だけに、こういう下々のくらしを暇さえあればよく見聞して歩いた。したがって木曾川流域では、尾張(愛知県)側でも、美濃(岐阜県)側でも、この輪中がたくさんつくられていることを知っていた。だから、大湿地帯である墨侯でも輪中なら十分水を支えることができるだろうと判断したのである。

信長は、

(サルのやつ、簡単に引き受けたがほんとうにできるのだろうか?)

と疑った。藤吉郎は、

「墨侯という湿地帯に城を造るのには、織田家の技術者ではダメです。特別に木曾川流域に住む土豪を使いたいと思います」

といった。信長は能力主義者だから、自分の目的を達成してくれる技術者ならだれでもいい。承知した。しかし、蜂須賀小六が木下藤吉郎に条件をつけた。それは、

「まず、われわれを織田家の正式な家来にして欲しい」

ということである。戦国時代なので、土豪たちはみんな地位が不安定だった。ときめく織田信長の家来になれば、その不安感も消える。そこで、

「輪中をつくる方式で、あの湿地帯に城を造ることは承知した。しかし、その前に身分保証をして欲しい」

というのである。藤吉郎はやむをえず承知した。そして、(もし信長様がゆるしてくれないときは、腹を切ろう)

と心を決めた。捨て身の覚悟であった。

蜂須賀小六は木下藤吉郎の快諾の返事をきいて疑ったが、しかし、

「おぬしを信じよう」

と藤吉郎の手を握った。藤吉郎は蜂須賀小六が動員した土豪集団を引き連れて墨俣にいった。ここでかれはこう告げた。

「おまえたちを三つの隊に分ける。一隊は城を造れ。一隊は斉藤側の反撃に備えて防備に当たれ。そしてもう一隊はすぐ寝てしまえ」

これにはドッと笑いが起った。とくに最後の、

「残りの一隊は寝てしまえ」

といういい方がとてもおかしかったからである。しかしこれは藤吉郎独特の用兵の法だ。

藤吉郎はかなり前から、

「大きな仕事は個人でやるものではない。集団でやるものだ。したがって、その組織に属する人間にはすべて協力精神(チームワーク)が必要だ」

と思っている。だから信長から命ぜられる大仕事は、すべてこの、

「個人でなく、組織としてチームワークを生みながらすすめる」

ということをもットーにしていた。蜂須賀小六がひきいてきた土豪集団を三つの隊に分けたのもそのためだ。

計画をきいた信長は、面白い、それはみごとに城ができるかもしれぬな、と満足した。そこで信長はみずから軍をひきい、犬山城に拠点をおいてここで切り出した材木をどんどん下流に流した。情報としては、

「伊勢神宮の修築をするのだ」

というガセネタを流した。材木を流したのは長良川だったが、長良川もいまと違って墨俣近辺で木曾川と合流する。この二大河川の合流だけでなく、付近の中小河川も流れこむから大湿地帯になったのだ。材木はどんどん藤吉郎の手元に届いた。これを使って一隊が交替で城を造る。一隊は防備に当たる。そしてもう一隊は休憩のために寝る。この振り分けが非常にうまくいった。小六集団はひとつも疲れなかった。むしろ、

「城ができたときは、おれたちは織田家の家来になっている」

という希望とよろこびが湧き上がっていた。墨俣城はみごとにできた。俗に“一夜城”といわれる。一晩でできた城という意味だ。まさか一晩ではできなかったが、かなり短い期間ででき上がったことは確かである。城ができ上がると信長は藤吉郎を褒めた。褒美をやるよといった。ところが藤吉郎は、

「わたくしに褒美はいりません。そのかわり、蜂須賀小六以下の土豪をすべて正規の家臣にしてください」

と頼んだ。信長ははじめ、そんなバカなことはできぬと反対したが、しかし真剣な藤吉郎の表情をみているうちに折れた。こうして、小六集団は正式に信長の家臣団に組みこまれた。